

周知のように、社会開発という言葉は、第1次佐藤内閣の表看板であった。私は当時開かれた社会開発懇談会において、経済成長がおくられても社会開発優先のために蛮勇をふるわれたいと要望したが、その蛮勇はついにふるわれなかった。そのため残念なことに、この看板は色あせてしまった。そして日本は経済大国になりあがった。

ヘドバークの表現をもってすれば、日本の経済成長は、フライ級の国土におけるヘビー級の経済発展ということになるが、そのヘビー級の発展がつづけば、日本人の国民所得は、1975年には70年の1.8倍となり、80年には4倍になると予測されている。70年代には、確実に西欧水準に到達し、85年にはアメリカに追いつくというわけである。このような予測は、最近のドル・ショックから考えてみても、かなりあやしいように思われるが、それはともかく、日本人は、こうした経済超大国への道をつっぱしってよいのであろうか。たとえ15年後にアメリカを追いつくとしても、空気はよぐれ水はにぎり後代の人間の健康を保障できないような国土で青息をはいっているとしたら、何のための経済発展であろうか。アメリカ並の国民所得が平均として達成されたにしても、その配分が偏り、なお多くの人々が生活の不安から解放されていないければ、その不安は繁栄のゆえに一層深刻になるかもしれない。この不安から解放された人々も、経済発展にともなって地価も資材も高騰し、上昇した欲求水準にみあった家がもてないとすれば、決して幸せにはならないであろう。生活水準が上るにつれて、寿命ののびた老後の生活も苦しくなるとすれば、経済大国から経済超大国になったとしても、どれほど意味があるであろうか。

経済大国から超大国へという夢は、ここで捨て去られなければならない。1960年代、生産第1主義におし流された日本人は、1970年代において生活の復権をめざすべきである。復権すべき生活優先の伝統が明治維新以来の近代日本の1世紀の間になかったとすれば、今こそ生活創建の時代が始まらなければならない。「成長なくして福祉なし」といわれた60年代はすぎ去り、首相自ら「福祉なくして成長なし」といわなければならない時代が、すでにきているのである。パイを大きくすることよりも、パイを分けることを優先させ、経済の発展との調和ではなく、生活環境の改善と社会保障の充実とを経済の成長よりも優位におかなければならない時代が70年代であるべきだというわけである。

こうして、日本の路線は、経済大国から超大国へではなく、経済大国から福祉大国へと転換されなければならない。明治維新以来の日本は、ひたすら富国强兵の道を歩んだ。しかし国民の多くは貧民にとどまった。戦後は、強兵の道を一応捨てたが、それだけに富国の道が猛進されたといってもよい。生活関連部門の社会資本投資を極力節約して生産関連部門の社会資本投資に集中してきた戦後日本は、たしかに部分的には豊かになったが、前者のストックの乏しさが一層目につくようになった。そのゆえに、ひずみの是正がとえられ、これに対して社会開発が旗印になったはずである。けれども、それは旗印になっただけで、路線の切りかえをともしななかった。そのために、たとえば、公害の増大による自然環境の破壊という高価な代償が、昨年来クローズ・アップされるに至ったのであり、「社会開発のために蛮勇をとときにはふるわせてもらいたい」と首相自身もいわざるをえなくなった。

社会開発という色あせた看板を、けずりなおしてかけるのではなく、全く新しい看板として、しかも偽りのない看板として高くかかげてほしいものである。首相は、この看板が国民の理解をえられなかったとも述べたといわれるが、その実を示せば理解されたはずであり、色あせもしなかったはずである。輝やかしい看板として社会開発が復権することこそ、「福祉なくして成長なし」という言葉の実証となるのであり、それが福祉大国の道を切り開いてくれることを心から祈りたいのである。